

第二部 小津監督との出会いから別れ

■ 小津監督との出会い



最前列中央(斎藤夫妻、信時潔、小津安二郎)

BGM:『秋刀魚の味』より「平山父子1」 作曲:斎藤高順

1952年(昭和27年)、夏の終り頃のことです。
私は松竹大船撮影所に呼ばれました。

私の目の前にいる岩のように大きな人物こそ、
当時の映画関係者の間では神様のような存在と
言われていた小津安二郎監督、その人でした。

当時、松竹大船撮影所で音楽部門を仕切っていた吉沢博さんの推薦で、私は初めて小津監督とお会いすることになったのです。

大変厳しい監督であるという噂は私の耳にも届いておりましたので、夢のように思う反面、恐ろしさで身も縮むような複雑な気持ちでした。

緊張のあまり口もきけずに頭を下げていると、
小津監督は開口一番「今までにどんな映画音楽を
作曲しましたか？」と言われました。

私は「まだ一度もやったことがありません。先生のお
仕事が初めてです。」と答えました。

すると、一瞬驚いたような表情を見せましたが、
すぐにニコニコ笑いながら「そいつはいいや。」
とおっしゃいました。

ほっと胸をなでおろすと、いきなり助監督に映画の台
本を持ってこさせ、その場ですぐに第一回目の打ち合
わせに入ったのです。

その台本は、芸術祭参加作品の『東京物語』でした。

東京物語より主題曲

作曲 斎藤高順



1953年（昭和28年） 松竹株式会社



■ 『東京物語』の隠れた名曲誕生秘話



原節子と東山千栄子

BGM:『秋刀魚の味』より「平山のある夜2」 作曲:斎藤高順

作曲家は、映画音楽の録音日の1週間から10日くらい前までにスコアを完成させておき、それを小津監督の前で一旦演奏披露するのです。

これが御前演奏会と言われ、小津監督は作曲家に御前演奏をさせる特権を、松竹大船撮影所でただ一人持っていました。

**もしそこで監督が気に入らなければ、作曲家は録音
当日までに書き直しを命じられるのです。**

**ついに『東京物語』の御前演奏会の当日となりました。
スタッフ連中は、極度の緊張状態にあったことはいう
までもありません。**

トップタイトルの音楽が終わっても小津監督は一言もおっしゃいません。

**それから次々と吉沢さんの指揮で曲が演奏され、
とうとうラストシーンの音楽も終わりました。**

恐る恐る監督の方に顔を向けると、一言
「今度の音楽はなかなか良いね。」と言われたのです。

続けて監督は、
「いいね、音楽みんないいからね、この通いでやってく
ださい。」と褒めてくれましてNGはひとつもなし。

スタッフの人たちがみんな喜んじゃいましてね、
今までにないことだそうです。

フィーリングが合ったのでしょうか。
もう嬉しくて、録音の日まで家で酒を飲んで寝てました。

ところがダビングの時点で、ひとつの問題が生じたのです。

それは、東山千栄子さんが戦死した次男の嫁、原節子さんのアパートを訪れるシーンの音楽をめぐって起きたのです。

私はこのシーンを映画全体のひとつのヤマ場と感じましたから、特にシーンとピッタリ合う品格のあるものと強く意識して音楽を付けました。

ところが、小津監督は

「この音楽はシーンと合い過ぎて、映画全体のバランスが崩れる。悲しい曲やきれいな曲では場面と相殺になってしまう。」と言いました。

つまり、NGということなのです！

しかし、当時の私はまだ二十代の怖いもの知らずな若者でした。

曲の出来映えに絶対の自信があった私は、天下の小津監督に生意気にも意見をしましたのです。

そして、どうしても譲らない私の態度を見て、とうとう小津監督の方が折れたのでした。

当時の様子を、近くでご覧になっていた笠智衆さんは、後日映画音楽のレコード発売の推薦文に次の様なコメントを寄せています。

「斎藤さんはなかなか自説をまげない人で監督の注文でも、納得しなければ絶対ウンと言わない人です。それでいて、小津先生の作品の色あいからは決してはずれなかったようです。
忘れられない小津先生のあの美しい画面がこれらの曲からなつかしく思い出されるのです。」

（笠智衆 談）

出典：『秋刀魚の味 一小津安二郎名作映画音楽集一』
（日本クラウン株式会社）

● 『夜想曲』が採用されたシーンの映像



映像：『東京物語』（松竹株式会社）

音楽がほとんど聞こえません！

私はその曲の出来ばえに自信がありましたから、とてもガッカリしました。

けれども、すっかり落胆した私の様子を見て、小津監督はこう言ってくれたのです。

「ぼくは、登場人物の感情や役者の表現を助けるための音楽を決して希望しないのです。」

また、こういう風にも仰いました。

「いくら、画面に悲しい気持ちの登場人物が現れていても、その時、空は青空で陽が燦々と照り輝いていることもあるでしょう。」

これと同じで、ぼくの映画のための音楽は、何が起ころうといつもお天気のいい音楽であって欲しいのです。」

こうした言葉によって、私は小津監督の映画音楽観を
しっかりと理解できたように思いました。

東京物語より夜想曲

作曲 斎藤高順



1953年（昭和28年） 松竹株式会社



■ 小津監督が好んだ「お天気のいい音楽」とは



斎藤高順(後列左から3人目)、有馬稲子、小津監督、笠智衆(前列中央)

BGM:『秋刀魚の味』より「平山父子2」 作曲:斎藤高順

「音楽についてはぼくはやかましいことはいわない。
画調をこわさない、画面からはみださない綺麗な音
ならいい。」

ただ場面が悲劇だからと悲しいメロディ、喜劇だか
らとて滑けいな曲、という選曲はイヤだ。
音楽で二重にどぎつくなる。

BGM:『秋刀魚の味』より「路子・揺れる心」 作曲:斎藤高順

悲しい場面でも時に明るい曲が流れることで、
却って悲劇感を増すことも考えられる。」

出典：『僕はトウフ屋だからトウフしか作らない』

「お天気のいい音楽」の象徴が「サセレシア」です。
では、「サセレシア」というタイトルは、一体どこから来たのでしょうか？

「小津監督から、サ・セ・パリやヴァレンシアのような
歯切れのよい音楽を頼むよ…。と言われて作った曲
に監督自身が命名しましたが、意味は不明です。」

（斎藤 談）

「サセレシア」=「サ・セ・パリ」+「ヴァレンシア」
造語？ 駄洒落？

これは、小津監督のちょっとした遊び心から生まれた
ジョークのようなタイトルだったのです。

● 「サセレンシア」パクリ疑惑？

小津監督は「サ・セ・パリ」や「ヴァレンシア」が大変好きだということを聞いていたので、両方の曲を調べたところ、まず8分の6拍子で変口長調、要所要所に共通する音が使われていることを発見しました。

そこで、とにかく拍子は8分の6とし、共通する音を楽譜に記載して、それを軸に自由に作曲したところ、「サ・セ・パリ」にも「ヴァレンシア」にも似たようであり、でも少し違うような面白い曲が完成しました。

「サ・セ・パリ」 ミスタンゲット(1926年フランス)※

「ヴァレンシア」 ラケル・メレ(1926年スペイン)※

「サセレシア」 斎藤高順(1956年)



音源:「小津安二郎が愛した音楽」(nihon Westminster)※

とても良く似ていますが、大丈夫なんでしょうか？
タイトルからして、パクリっぽいんですが…

「サセレシア」＝「サ・セ・パリ」＋「ヴァレンシア」

安心してください！

もう時効ですよ。

✦ 深刻なシーンに陽気なBGM



映像:『東京暮色』(松竹株式会社)

● 斎藤高順が導き出した答

小津監督は、「サセレシア」や「ポルカ」調の音楽を付けると「なかなかいいねえ～」と言ってご機嫌でした。

小津監督の音楽の好みを言葉で表すと、次のような感じになります。

- 弦による甘く明るい大らかな旋律、明るい中に一抹のわびしさを感じさせる様な和声の進行
- 長調の曲の中で一時的に短調に転調
- 長調なのに主音の「ド」よりも「ラ」の音を主にして何となくペーソス(哀愁)を持たせる

これらを意識して曲を作ると、小津監督からNGを出されることはありませんでした。

東京暮色よりサセレシア 作曲 斎藤高順



1957年（昭和32年） 松竹株式会社



■ 『秋刀魚の味』のポルカには歌詞が付くはずだった？



笠智衆と岩下志麻

BGM:『秋刀魚の味』より「平山のある夜1」 作曲:斎藤高順

最後の作品になるとは思っていませんでしたが、「秋刀魚の味」の時にも「サセレシア」を使いたいとおっしゃるので、「違う曲を書きます。気に入らなければ書き直しますから。」と言って書いたのが、あの映画で使ったポルカです。

BGM:『秋刀魚の味』より「三度かおるへ」 作曲:斎藤高順

これも気に入ってくれて、「次回作もこれでいこう。」
と言ってくれたのですが…。

「ぼくが詞を付けるから、宝塚の寿美花代あたりに
歌わせてレコーディングしよう。」なんておっしゃって
いました。

残念ながら、実現することはありませんでしたが。

● 次回作『大根と人参』に挿入歌？

『大根と人参』の主な配役、設定、ストーリーなど、小津監督と野田高梧の間では詳細な話し合いが進められていました。

音楽は斎藤高順、挿入歌として「秋刀魚の味」のポルカに小津監督自身が歌詞を書いて、宝塚の寿美花代に歌わせるという企画があったのです。

小津監督は『小早川家の秋』の撮影のため、1961年(昭和36年)5月24日から10月3日まで、宝塚撮影所近くの宿に滞在しました。

撮影の合間に何度も宝塚の舞台へ通い、宝塚歌劇団の娘たちともすっかり仲良くなり、彼女たちも小津が滞在する宿を度々訪れました。

その中のひとりが寿美花代でした。(前列右端)



**宝塚・門樋旅館にて寿美花代・原節子らと(昭和36年9月頃)
出典:「小津安二郎 人と仕事」(蛭友社)**

小津監督は、「秋刀魚の味」のポルカに一体どのような歌詞を付けるつもりだったのでしょうか？

そのヒントは、『大根と人参』のストーリーの中にありそうです。

『大根と人参』は、旧制高校以来の親友二人の家族を中心に描いた物語ですが、同窓生のひとりが癌に侵され、治療の甲斐もなく息を引き取ります。

これは、『早春』ではじめて「サセレシア」が使われたシーンとオーバーラップします。

『早春』では、池部良が同僚の増田順二を見舞うシーンと、増田順二の葬式のシーンに「サセレシア」が使われました。

『大根と人参』では、笠智衆が同窓生の信欣三を見舞うシーンと、信欣三の葬式のシーンに歌詞の付いた「秋刀魚の味」のポルカが使われるはずだったとしても不思議ではありません。

では、この最も悲劇的なシーンに流れる挿入歌に、小津監督はどんな歌詞を考えていたのでしょうか？

● 歌詞のお手本はフォスターか？

『一人息子』や『東京物語』にも使われた、小津監督が敬愛するフォスターの代表作は、死者を弔う唄でした。

「オールド・ブラック・ジョー」や「主人は冷たい土の中に」は、明るい曲調に死者との別れを悲しむ歌詞が付けられていました。

「秋刀魚の味」のポルカは、癌で死んでいく友人へ捧げる小津監督のメッセージが込められた「レクイエム」になるはずだったのでしょうか？

それとも、明るい曲調に合わせ、陽気な歌詞を書くつもりだったのでしょうか？

しかし、癌で死んでいく同窓生の話を書いていた小津監督本人が、皮肉にも末期の癌に侵されてしまい、この企画はとうとう実現することなく、監督はこの世を去ったのです。

小津監督が、「秋刀魚の味」のポルカにどんな歌詞を付けたかったのかは、永遠の謎となりました。

秋刀魚の味より主題曲・ポルカ・エンディング

作曲 斎藤高順



1962年（昭和37年） 松竹株式会社



■ 小津監督との別れ



東野英治郎、小津監督、杉村春子

BGM:『秋日和』より「エンディング」 作曲:斎藤高順

小津監督の印象については、怖い人だと言う人もおりましたが、私には優しい人しか思われませんでした。

仕事場ではとても厳しい方でしたが、少しも辛いと思う事はありませんでしたし、普段もよく飲みに行こうと誘われました。

撮影はだいたい夕方5時頃には終わり、その後は決まって横浜あたりに出て一緒にお酒を御馳走になりました。

いろいろな雑談を重ねていくうちに、お互いの気心も知れるようになり、時には私も浅い経験から割り出した幼稚な意見などを吐くようになりましたが、小津監督はそれらを一つ一つやさしく聞き入れて下さいました。

また、カラー1作目の『彼岸花』の中で、山本富士子さん扮する旅館の娘が、佐分利信さんのお宅へ訪問するシーンがありました。

あの時、山本さんが持っていた真っ赤な風呂敷は、私たち夫婦が結婚した時の引き出物なんです。そういうところなど、本当に遊び心のある方でした。

小津監督は1963年(昭和38年)になって、築地の国立がんセンターに入院されました。

そこへお見舞いに行ったのがお別れになってしまいました。

個室に入っていらして、佐田啓二さん(中井貴恵さん、貴一さんの父)が付き添っていましたが、私が行くと病室のまわりがずいぶん賑やかなんです。

どうしてなのかなと思って病室に入ってみると、原節子さんと司葉子さんがお見舞いに来ていたんです。看護婦さんたちが、二人が病室から出てくるのを待っていたんですね。

小津監督は、頸部にできた癌のため相当な痛みがあったはずなのに、私が訪ねるとベッドの上に身体を起こして、「斎藤君、よく来たね。」と歓迎してくれ、次のようにおっしゃいました。

「斎藤君、ぼくの映画に作曲した楽譜は大事にとっ
ておきなさいよ、きっとまた役に立つことがあるか
ら。」と言われたのです。

小津監督は、本当に私の音楽を評価してくれていた
んだ…ということを実感し、胸が熱くなったことを覚えて
います。

あとは、何を話したのか思い出せません。

**監督が亡くなられたのは60歳、1963年(昭和38年)
12月12日の還暦の日でした。**

**小津監督とは、私が27歳の時に出会い36歳でお別
れしました。**

**たった10年間のお付き合いでしたが、生涯忘れるこ
とのできないとても大切な思い出になりました。**

昭和27年、蒸し暑い夏の終りの午後、大船撮影所で
小津監督に初めてお会いした日のことは、今でも昨
日のことのようにはっきりと覚えています。

まるで夢のような10年間でした。

小津監督、本当に有難うございました。

秋日和よりオルゴール

作曲 斎藤高順



1960年（昭和35年） 松竹株式会社



斎藤高順さんとの思い出

● 「たんぽぽ」初演時の写真 1994年2月



多摩プラーザ・サンメディアスタジオ

● “ふるさとを詠う”コンサートより「たんぽぽ」 歌唱：三浦靖子



作詞：柏木隆雄 作曲：斎藤高順 ピアノ：朝岡真木子



『秋刀魚の味』のエンディング・シーンが、小津映画そのもののエンディング・シーンとなりました。

娘を嫁に出した後、わびしさを全身で表現するシーン、ここで小津作品に最も多く出演した笠智衆による名演技のバックに斎藤高順の音楽が流れます。

この印象的な名シーンを最後に、小津芸術は幕を下ろしたのです。

● 笠智衆の名演技と斎藤高順の音楽によるエンディング・シーン



映像：『秋刀魚の味』（松竹株式会社）

